

「生命地域」を未来へつなぐしまね・中山間地域セミナー ——意見交換会記録——

◎藤原先生によるセンターからの報告に対するまとめ

- 澤田さんのお話で特に重要なのは、「空間的な問題」と「時間的な問題」の両方を考えて取り組むことの重要性です。
- 空間的な結束力が不可欠であり、数十cmの柵の隙間で被害に合うなど、わずかなミスが全体を台無しにする恐れもあるため、慎重に進める必要があります。
- 空間的にも地域を結びつけ、時間的にも長期的に取り組み、次世代へと確実に伝えていくことが求められます。
- この仕事が非常に緊張感のある重要なものであることに驚きました。
- 座学を繰り返し、知識を対話によって積み重ねていく必要がありますが、すぐには成果が出ない長期的な取り組みが欠かせないことを学びました。
- 有田さんのお話からは、以下の2点が特に印象的でした。

1. 災害時に役立つものは、平時から役立つものである。私たちは常に災害に強い地域を作りいかなくてはいけないが、それは決して災害の時だけのものではないことを学びました。
2. 私も子ども食堂や地域食堂の取り組みに大変関心がありますが、これが地域の共感や共助につながっている点です。

高齢者が料理を作ることで生きがいを感じるなど、地域で生きている方々の活性化にも寄与しているように思います。

私自身も「アルモンデ食堂」に伺ったことがあります。一言いただけますか？

◇アルモンデ食堂（関係者発言）

「國方と申します。農家さんとのつながりの中で、余剰野菜や普段廃棄してしまう食材を寄付していただいている。お互いにとって良い取り組みなので、今後もこうした活動を続けていきたいと思っています。」

- 料理や食を提供する場、消費者対策、生産者対策はそれぞれバラバラではなく、各々の「関係性の構築」が重要です。
- 近代科学の弱点は「問題を論じる」ことを失敗してきたことです。
- 2人のお話から、人間同士の関係性を工夫し、空間的にも地域的にもつなげることの大切さを学びました。
- まとめとして、2人の話をつなぐキーワードは「自治とは何か」という点にあると思います。

- ・ 大きなものに頼らない、大きなものを利用しながら「自分達で自分たちの問題を解決する」ことが重要です。
- ・ 澤田さんのお話であれば県の対策チームを活用し、有田さんのお話であれば共食の機会を増やし活用すること。子どもだけでなく高齢者も含めて地域を活性化していく。
- ・ 「自分たちの生活の場を自分たちらしく設計していく」というセルフガバナンスが重要であり、鳥獣対策や子ども食堂、共食の場づくりに通じています。
- ・ こうした具体的な取り組みを通じて、理論的に研究していることが実証・反省され、理解が深まる貴重な時間を過ごせました。

○藤原先生より澤田科長へ質問

「対策で得た肉の流通の課題について教えてください。」

○澤田科長の回答

- ・ 島根県はほぼ全域が豚熱感染区域になっています。イノシシ肉をジビエで利用する場合は、イノシシ肉を検査して、豚熱に感染していないことが確認されイノシシ肉を流通させることができます。したがって、現時点でイノシシ肉を流通させることはハードルが高いです。今後は、シカ肉の利用を含めて考えていく必要があります。
- ・ こうしたジビエの活用は、供給量が不安定な部分もあります。個人的な意見としては、地域からボトムアップに対して、行政が必要な支援を講じていくことが重要だと考えています。

○藤原先生より有田研究統括監へ質問

「子ども食堂や地域食堂に対する生産者の反応はいかがですか？」

○有田研究統括監の回答

- ・ 子ども食堂や地域食堂に農家さんも参画しています。特に自営業者が主体となっていることが多く、彼らは自立・自営しているため関わりやすい状況です。

○藤原先生のコメント

「自立・自営がキーワードです。自立とは単なる孤立ではなく、『誰か安心して頼れる人がいること』であると2人から学びました。」

○会場から藤原先生への質問

質問1

「ヨーロッパとは異なり、日本の中山間地域政策はなかなか方向性が定まらないが、本当に統合的な中山間地域政策は可能か？」

回答

- ・ ヨーロッパで地域政策が機能した背景にはEUという強力な枠組みがあります。これは

「国家のための国家地域政策」ではなく、国境を接した国同士のけん制関係があったから政策が機能したのです。

- 日本は海に囲まれているため他国のプレッシャーは少ないですが、国内にも多様な地域が存在します。日本の地域政策はボトムアップ型の伝統が強いので、これをさらに追求していく必要があると考えています。

質問2

「食や飢餓などの幅広い世界問題を小中学生に伝えるのが難しい。良いアプローチはありますか？」

回答

- 若者にウクライナやパレスチナ問題を伝えるのは簡単ではありません。特に小中学校の先生にとって重要な課題ですが、共感してもらうために小説や映画などの作品を活用する方法が有効です。
- 例えばパレスチナ詩集を読むことで、子どもたちに伝えたいことを近く感じてもらうことができ、大学でも効果的でした。

質問3

「海外の巨大な食権力が地域を形成しており、そこから守るための手法の話があったが、今タイマリーな話題で保守層とどのように共通認識が持てるのか？どのように語りかけるべきか？」

質問4

「戦前の穀物を牛耳っていたのはユダヤ系であるという話や、『インソーシングや有機農法』を推進することが差別的に受け取られる可能性がある。多様性の重要性を語る際に、伝統や女性差別など他者排斥に繋がらないよう注意すべき点は？」

回答（質問3、4一括回答）

- 私もその点には注意しています。保守の方から講演依頼があることもありますが、これらの問題は民族や人種といった差別の問題ではなく、地球規模の経済問題として語るようにしています。
- 排外主義的な外国の言説は「私たちが健康であれば良い」から「私たちだけ良ければいい」という狭い視野に陥りがちです。ナチスがユダヤ人企業を一括りにし、問題を乱暴にまとめることで本質から目をそらさせたことも例として挙げられます。
- 本当は粘り強く膝をつき合わせて話し合うことで誤解を防ぐことができます。